宗像

毎月十五日発行
発行所
宗像大社
宗像会
〒811 35 福岡県宗像郡玄海町
電話 0940-62-1311代
定価　一年送料共 1000円

神具、装束
結婚式場用品
株式会社 井筒
九州店 福岡市博多区東公園二一三二（〒八一二一）
電話福岡（〇九二）六五一－九四五六番
京都市下京区小路条北入（〒六〇〇）
電話京都（〇七五）三四三－三三四一（代）四番
本社

節分祭斎行

═災難消除・延命招福を願い═

二月三日（日）、午前十時より当大社祈願殿に於て、伊豆善也、小山達生両県議会議員、和田延広玄海町長を始めとする宗像郡市知名士、又氏子会関係者並びに崇敬者、一般参拝者等多数参列の下、葦津宮司以下の神職奉仕により、節分祭が厳粛且つ盛大に斎行され、本年一年の災難消除・延命招福を祈念した。

定刻宮司以下神職、参列者が祈願殿所定の座に着座の後祭典開始、神前には海子会・崇敬者代表・年男代表が各々神前に玉串を奉奠し、災難消除・延命招福を祈って拝礼、祭典は滞りなく終了した。

祭典終了後、祈願殿正面石舞台に於て「豆打ち式」が執り行われた。参列者は舞台下の大駐車場前庭に参集、神職と参列者の中より選ばれた裃姿の年男代表が、福豆の入った一升桝を手に、「鬼は外／福は内！」と唱え福豆を撒き豆打ちされた。更に天地の邪気を祓い清める「鳴弦の儀」が、祈願殿正面石舞台にて神職二名により執り行われた。一名は東北の天空に向け、一名は南西の地上に向けて、葦矢・桃矢を三度射る、古式に則った儀式で行われ、宗像大神の御神威により、天空地上の邪気が祓われた。「鳴弦の儀」の後玉串拝礼を行い、宮司、氏子会・崇敬者代表・年男代表が各々神前に玉串を奉奠し、災難消除・延命招福を祈って拝礼、祭典は滞りなく終了した。

（鳴弦の儀）

祭典終了後、祈願殿正面石舞台に於て「豆打ち式」が執り行われた。参列者は舞台下の大駐車場前庭に参集、神職と参列者の中より選ばれた裃姿の年男代表が、福豆の入った一升桝を手に、「鬼は外／福は内！」と唱え福豆を撒き豆打ちの儀を行った。又特別に準備した福袋（福豆、紅白小餅、お菓子等が在中）も撒かれ、参集した参列者等に授与された。

「豆打ち式」終了後、斎館に於いて直会が行われ、正午過ぎ和やかな内に散会した。

一方同時刻、中津宮でも大島村の島民が集う中、節分祭が斎行され、日曜日の楽しい一刻を過ごした。

当日はまさに、春到来を想わせる様な小春日和となり、例年になく絶好の天候で、春を招く祭典にふさわしい一日であると共に、日曜日でもあった為、老若男女の一般参拝者が多数参列、祭典も盛大に斎行することが出来た。

この「節分祭」を境いに宗像の地にもいよいよ緑が芽吹いてくる。寒い冬に耐え、待ちわびていた春の足音が、もうすぐそこ迄に近づいているのである。

御礼

節分祭斎行に際しましては、崇敬者の皆様方より誠心からなる御協賛を賜り厚く御礼申し上げます。

お陰をもちまして、二月三日（日）祭典も無事滞りなく盛大裡に斎行致すことが出来ました。

ここに誌面をかり、謹んで御礼申し上げますと共に、皆様方の益々の御繁栄を心より祈念申し上げます。

昭和六十年二月三日

宗像大社社務所

崇敬者各位

論説

何のための建国記念日か

さる十一月二十七日、「建国記念日」奉祝式典実行のための準備会が開かれ、来年度の奉祝行事をどのようなものにするかについて関係者の話し合いが行われた。これを取り上げた新聞は、宗教色を極力排除することで、参加者の意見はほぼ一致したと報じている。〝ほぼ〟とは完全な一致ではなく、反対もあったということである。

極力排除すべしという宗教色という言葉についても明らかでない。これまでの式典の経過、この度の出席者の発言などを総合すると、どうやら、これは橿原を拝礼しないこと、神武建国に触れないこと、聖寿万歳をやらないことを含むもののようである。一体このようなことが宗教的などといえるか、それも大きな疑問であるが、日本の建国を奉祝するに当たって、建国の始祖神武天皇橿原宮に及ばないこと、日本国の象徴である天皇陛下の万歳を唱えないなどとは、奉祝の原点を否定するものである。

○

日本の建国は神武天皇の建国である。神武天皇の存在について史家の中には否定するものがあるが、神武天皇橿原宮は、日本最古最高の古典、古事記日本書紀の明記するところであり、これに代る典拠は存在しないのである。しかも日本人は古代から今日に至るまで、神武天皇を肇国の始祖として仰ぎ、神武肇国の精神を国家国民の基本原理として尊重し、事あるときにはそれを深く回顧して新生復興の源泉としてきた。これは何人も否定できない日本人の精神史である。明治維新が神武復古を目途として成就されたことは近代の事実である。

「日本国ならぬ国」の建国式典ならいざ知らず、日本の建国式典に於いて始祖天皇に及ぶことは当然のことであり、それを抜きにしたものは絶対に考えられない。もしあるとするならば、主催者は自らの考え奉ずる建国事情とその精神を提示しなければならない。

○

この度の奉祝準備会の方針は、政府・自民党の意向を強く受けたものであるようである。論理は、建国記念日の式典を全国民的なものにするためには、反対者からけちのつけられぬものにしなければならぬ。そのためには、とかく言われる宗教色、即ち神道色を排除しなければならぬ――こういう訳である。これについては多くの飛躍があるが、細かいことはいわない。ただ、その筋が宗教色と考えるものの払拭排除によって、式典は全国民的になるかについては追究しなければならない。結論的にいうならば建国の祝典にならぬばかりか、それは魂の抜けた形骸物になり終わるだろう。

われわれは、建国記念日については屈辱的な戦後の歴史をもっている。戦後、国民の祝日が検討されたとき、国民の大多数は紀元節の継続を熱望した。日本人の心には、それは日本人の誇りであり、日本永生の願いと不可分に結びついていたからである。しかるに、占領軍は国民意思の確たる証拠を知りながら、これを土人の思想、民主思想に反するものとして反民主的に廃止させた。日本弱体化政策の一環であった。この国民切望の紀元節が「建国記念の日」として復活したのは戦後二十年、昭和四十一年のことであり、そのためには神社界はじめ有志の並々ならぬ苦心があったことはいうまでもない。建国記念日を設けることはそれを圧殺した占領軍の思想を否定することであり、その継承者である一部知識人マスコミとの戦いでもあった。建国記念日の復活はそのような歴史的意義をもつのである。

○

国民の祝日はその日をただ関係ありとして決められたものではなかろう。それぞれの日には、それが設けられた意義や精神があるべきである。五月三日は憲法記念日であるが、この日とであり、この日が新憲法の施行された日の憲法を理解し顕彰することを目標として設けられたに違いない。二月十一日もただ闇雲に建国の日として設けられたはずがない、建国の古を偲び建国の精神を回顧する日として設けられたことはいうまでもない。もし該祝日に奉祝のしかるべき意義と精神がなければ設定の必要もなければ式典も不要である。奉祝式典実行のための準備会ではその点、徹底した議論がなされたのであろうか。その点の検討なくして、徒らに首相の出席を焦ってはなるまい。

神社本庁では、奉祝の原点を否定するような会に参加することは無意義として不参加を表明している。

（神社新報より）

余滴

昭和六十年。二十一世紀まであと十五年と迫った。高度な科学文明時代の到来である。最近の子供達の関心は、パソコン、テレビゲームに向けられ、昔の素朴な遊びとはすっかり様変りしてしまった。ニューメディア時代、ハイテク時代と国中が尖端科学技術の恩恵を受け、戦後、無一物の廃虚の中から再出発した国民とは到底信じられないほどの繁栄ぶりである。この驚異的躍進の原因については種々論じられているが、民族的特性、資質にも大きな関わりがありそうである。例えば日本人は計算、特に加減乗除の暗算が得意だと言われている。国際的学力比較テストでも日本の中・高校生は欧米の生徒よりも遥かに正確に計算するし、外国からの旅行者が日本の店員の計算の早さと正確さに舌をまくと言う。その理由には十進法の伝統と数字の呼称の単純さということばの問題が大きく働いている。日本では十進法が古来、定着しており、これが計算に便利なことは言うまでもない。また、百・千・万・億などの単位の呼び方が外国語に比べて簡単で、暗算の思考が中断されなくてすむ。そしてこれらの条件に加えて、そろばんの使用がこの能力を倍加した。しかし昨今は電卓の普及で次第にそろばんが姿を消しつつある。相撲、柔道と同じく生活環境の変化により日本人の特性が薄れその王座の地位は大きく揺らいでいる。目先の繁栄に浮かれていると、糸の切れた凧のように堕落の浮目を見る。「和魂洋才」「温古知新」といった自戒の言葉が一層必要な時代の到来である。

第二八三回　宗像大社歌会詠草

中村吾郎　選

毎月末日〆切

大　島　目原　節子
夜の庭に空缶ころがる音聞こゆ時折風の向き変はるらし
（評）生きて空缶が、右に左に転がる音が聞こえる。瞬間的に促えた聴覚がするどい。

八幡西　山田　耕夕
吐く息の白く流るる坂の辺に霜枯れし菊黒ずみて立つ
（評）ふと立ちどまって目にした冬の菊、静かなまに生き生きとした歌。下二句に心情の流露を見る。

東　郷　藤崎　辰子
安政の肥後の石工の哀しみに通潤橋は白く水吐く
（評）結句の「白く水吐く」に依り、石工たちの哀しみが広がる。四句の固有名詞が重要性を持つ。

深　田　中野　節子
出会ひたる老人連れは着膨れて忘年会に誘ひ呉れたり

戸　畑　田中ハツセ
義涕外し食事始めし夫の顔顎のあたりの亡き姑に似る

田　久　立花　勇雄
喜寿のわれつつがなき身の父に似し足指そろえ柚湯浴びゐる

田　熊　鷲津かつ代
病名を重ねてなほも生きんとす目当とすべき何もあらねど

自由ケ丘　後藤君代
春浅き朝の空に忙しく羽ばたくひばり声澄みわたる

大　島　中村さつき
疾風吹き欠航つづく海中に急患乗せたる漁船が航く

王　丸　村山　菊代
北吹けば葉ずれの音のさわだちて池の干潟に枯葉のまろぶ

大　島　目原　節子
夜の庭に空缶ころがる音聞こゆ時折風の向き変はるらし
（評）生きて空缶が、右に左に転がる音が聞こえる。瞬間的に促えた聴覚がするどい。

八幡西　山田　耕夕
吐く息の白く流るる坂の辺に霜枯れし菊黒ずみて立つ
（評）ふと立ちどまって目にした冬の菊、静かなまに生き生きとした歌。下二句に心情の流露を見る。

東　郷　藤崎　辰子
安政の肥後の石工の哀しみに通潤橋は白く水吐く
（評）結句の「白く水吐く」に依り、石工たちの哀しみが広がる。四句の固有名詞が重要性を持つ。

深　田　中野　節子
出会ひたる老人連れは着膨れて忘年会に誘ひ呉れたり

戸　畑　田中ハツセ
義涕外し食事始めし夫の顔顎のあたりの亡き姑に似る

田　久　立花　勇雄
喜寿のわれつつがなき身の父に似し足指そろえ柚湯浴びゐる

田　熊　鷲津かつ代
病名を重ねてなほも生きんとす目当とすべき何もあらねど

自由ケ丘　後藤君代
春浅き朝の空に忙しく羽ばたくひばり声澄みわたる

大　島　中村さつき
疾風吹き欠航つづく海中に急患乗せたる漁船が航く

王　丸　村山　菊代
北吹けば葉ずれの音のさわだちて池の干潟に枯葉のまろぶ

宮　田　片山　朔子
いささかをアフリカ飢餓の募金にと振替えを組む孫の名借りて

福　間　広渡一寿軒
吹雪く外見守る母は帰り待つ子の為に焼く餅も気にして

大　島　板矢あきえ
人住まぬ家に干されし大根のしなびて風にゆるる歳晩

香　椎　桜井　ツ子
お下げ髪の吾を知るといふ君と会果てて夕づく街を帰りゆく

池　田　永富　臻
冷えしるき朝の仏間に香焚きぬ父と母との画像を見つつ

武　丸　立石ろせ乃
正月も七日となりて静かなり七草雑炊一人啜りて

津　丸　古賀　文月
古稀過ぎて老のゆく末思う時元旦の朝寒き身にしむ

日の里　清原　絹代
高台にならぶ「ポプラ」の黄の光りすむ青空の中に直ぐ立つ

田　熊　力丸　一郎
宗像のダム完成の土手に見る水域はるか朝霧にかすむ

沈丁の赤き蕾に降る雪は積むとしもなく淡く消えゆく

宮　田　片山　碧村
山里の森蔭に鳥の声聞きて安らぐ吾は日稼ぎの仙人

東　郷　田中　春子
長病みの吾をてあつくいたはれる夫にときおり吾のいらだつ

大　島　本田よしえ
さざ波の煌き寄する砂浦夕風たちて磯の香匂ふ

大　島　屋形とみえ
クリスマスに孫の演ずるマリア様もの言はぬまま母を探せり

原　町　八波　五月
卒業証書もなく引揚げし児等思ひ夫は肌身に校長印一つ

本殿裏より白煙

――文化財防火デー訓練終る――

一月二十四日午前十時、大社境内の火災報知器が作動し、ベルがけたたましく鳴り響いた。

小雪まじりの雨の中、神職、巫女達が消火器を手に走る。大社自衛消防団団長の宇都宮権宮司がハンドマイクを片手に「出火は本殿裏山だ!!配置に付け!!」とさけびながら現地に飛ぶ、施設消火機のボタンがおされる、同時に各職員は自衛消防隊班別に持場に着いた。ホースが引かれ、放水が始まる、バケツ片手の巫女がリレーを始める。

権宮司の司令より五分、宗像郡消防本部消防車、玄海町消防団第一分団消防車がサイレンの音も勇ましく到着した。これは文化財防火デーの防火訓練である。

毎年、一月二十六日に全国的に行われた「文化財防火デー」は今年で三十一回目を数える。今を去る三十六年前の昭和二十四年一月二十六日に、奈良法隆寺で障壁画修復中に出火し、金堂等貴重な国宝が焼失した。

又二十五年には京都の金閣寺が全焼する事故があった。この様な国の文化財が火災により焼失するのを防ぐ為、先年の国民的財産の消失を反省し、国の行事の一つとして昭和三十年より、文化庁、消防庁の要請により文化財を守る防火デーが、法隆寺出火日の一月二十六日として制定された。以後毎年一月二十六日に全国の神社仏閣を中心に国の文化財を守るべく防火訓練が行われ今日に至っている。

当大社でも毎年一月二十六日に行って来たが、今年は防火演習を地区消防本部の協力を得て、防火週間中の二十四日十時に定め訓練を行った。

宗像地区消防本部、山内伸夫消防長以下二十七名、消防車四台と玄海町消防団安部淳司団長、湯浅第一分団長以下十八名、消防車一台の協力により近年にない本格的な防火訓練が実施されたのである。

約二十分で訓練は終了した、葦津宮司より文化財防火デー制定の説明と協力に対する御礼の挨拶があった。山内消防長、安部団長より講評があり、当大社自衛消防団も合格点をいただき、宇都宮権宮司以下職員も、文化財を守る責務を新たにした。講評のあと清明殿裏庭において粉末消火器による防火訓練が巫女を中心に行われ、日常よく目にする赤色の消火器も、本番になるとなかなか意のままにならぬ様子であった。

又消防署員より灯油等は

全国に魁けて

大島村の成人式

玄海の離島大島は、昔から好魚場の中心に位置し、県内でも有数の漁業基地として栄えて来た島であるが、ここでも若い青年、女子は限られた生活環境に満足しきれず、こぞって島を離れ、都市へと職を求める傾向がつづいている。

しかし、島を離れた若人等も、正月には家族や友人等との再会を楽しみに必ず磯の香りもしみ入る郷里大島に帰って来る。

大島村では、帰省者の多いこの正月を選んで、成人の喜び、故郷の良さを一緒に再認識して貰う意をこめて、毎年一月二日、全国に散会となった。

本日を境に、新成人の若

者達は、世界情勢や、国内問題にも除々に関与していく訳であるが、今後は自己の人格完成をめざすと共に、社会的には国家社会の繁栄、発展に協力する真の民主的な日本人となるよう心がけ、一人前の人間としての責務と、自覚をもつ人間として日々努力を重ね、常に広い視野で物事を判断する事が出来る様な社会人に育ってほしい。

今迄以上に苦しい事、辛い出来事に直面する事が多いと思うが勇気と信念を以って、正面から立ち向い自分自身をより一層高めてもらいたい。

今迄は、どこか周囲の人達に対して甘えた気持ちが有ったと思うが、今後は自己には厳しく、人に対しては思いやりを以って接し、いつも笑顔を忘れない様な社会人になる事は勿論の事、将来大島村の繁栄に寄与出来うる人材に成長されん事を祈念する。

後、中村国美弥村長より激励の辞が述べられ、河辺議会議長、目原教育長からそれぞれ祝辞が贈られた。

次いで記念品贈呈、成人代表の力強い誓言とつづき、なごやかなうちに散会となった。

本日を境に、新成人の若

五穀豊穣を感謝し

献米奉告祭斎行

新春の一月十三日、午前十一時より本殿にて、恒例の献米奉告祭が氏子総代、並びに崇敬者多数参列のもと斎行され、祭典終了後鏡開きが、盛大に執り行われた。

献米奉告祭は、宗像郡市内氏子の方々より奉献された新米を御神前にお供えし、豊穣に対する神恩に感謝すると共に、本年の豊作と一年間の無病息災とを祈念する祭りである。

例年春、秋の大祭と献米奉告祭には、氏子の代表が、各々交代で奉幣使としてお祭に御奉仕戴き、本年は、宗像市吉武の池浦富蔵氏が務められた。宮司祝詞奏上に続いて、奉幣詞が奏上され、氏子会長を始め、参列者が玉串を奉奠して無事祭典を終了した。

引き続いて、氏子会永年勤続者表彰式が執り行われ、津屋崎町須多田の寺嶋忠夫氏、津屋崎町勝浦浜の永島正助氏、津屋崎町渡の花田市平氏、上西郷内殿の八波武氏、田島山ノ上の古藤重俊氏、大島村の遠藤沖之助氏の六氏に、宮司より永年の誠心からの御奉仕に対して、感謝状並びに記念品が贈呈された。

又、当日斎館直会々場に於て鏡開きが、盛大に執り行われ、氏子の方々より献げられた餅米で作られた約千個のお餅は、雑煮や汁粉にされ、参列者、神社職員一同それをいただきながら楽しく和やかな時を過ごした。

尚、郡市内氏子の方々より御奉納戴いた献米は、今年一年間、当大社日供祭の神饌として、毎朝、御神前にお供え申し上げ、氏子の皆様方の弥栄を御祈り申し上げております。

神郡社寺めぐり (6)

神興神社（福間町大字津丸）

国道三号線の久末インターを下ると福間東中学校の新しい校舎が目に入る。

この中学校正面校門に並ぶ様に石の鳥居が建っている。神額に「神興社」と記されている。校庭のフェンスが鳥居の横に並び、かっての神域をしのぶ事は出来ないが、周囲はしずかな山村である。

鳥居横フェンス前に神社由緒板がある。

神興神社縁起

祭神宗像三女神

多紀理姫命

市杵島姫命

多岐都姫命

神興神社は往時より斯の地に御鎮座あり十一部落即ち（上西郷、下西郷、久末、津丸、手光、村山田、八並、本木、畦町、内殿、舎利蔵）の住民に依り祭祀を斎行す。

例祭は十月五日、宗像三社御縁に曰く、宗像三女神最初室貴の六ケ嶽に有り御着、則ち神興村に留り給ふ、此の村に於て神威被蠕を以て神興と号す。其の御三所の霊地（田島、大島、沖ノ島）に御遷座あり云々とあり、その三所に遷り給える。

後も此の地にも御社殿厳かにして祭祀も盛んなりしと、然れども何れの頃にや、兵乱に遭ひ御社も崩壊せしが村民の「土市」といふ者ありて夢の御告げあり小祠を営む、其の後、早抜凶作年に祈れば霊応ありとて隣村民力を合せ石祠を建立す。

大正年間古瓦発見せられ鑑定の結果吾が国で二番目に古いものと判りこの神社の往時を偲ぶ事が出来る。

昭和五十五年拾月吉日

神興神社社務所

と記されている。この神興社は正平年中行事に、七十五社の一つとして、御縁起の三所大菩薩最初後影向地事の条に前記由緒と同じ意が記されているのを見ても大変大社に関係深い土地であり、又「神興」と呼ばれる地名の意味も理解出来るのである。

又筑前国続風土記附録、宗像郡中津丸村の条に、「村の南六町計、圃の中に神興という所あり。古瓦多有り。又礎石も残れり。村老伝て云ふ。いにしえ宗像三女神、鞍手郡室木嶽よりしばらくここに遷座し給ひし時の社地なりとぞ。」とある。

現在の神域をたずねた時隣地の校庭で学ぶ生徒達をながめる様に鎮まる社殿に母なる大地の様なあたたかみを感じ、神郡の歴史は生きていると身に深く感じたものである。

【授与品紹介】

車輌用御守 (7)

◇ステッカー御守

――追突防止・交通安全啓蒙用お守り――

今回は、車輌用お守札の中でも特殊なお守として、参拝者の皆様に授与致しております「ステッカー守」についてご紹介致します。

このステッカー守は、前回ご紹介致しました「反射守」と同じく、車輌外部の主に後部に装着してお祀りしていただく仕様となっております。

ステッカー型式のこの守札は、当大社が昭和四十年頃に、車輌本体の守護と他車輌並びに一般通行者に対する、交通安全の啓蒙を推進することを目標として、全国で初めて作製したお守りであります。

当初は、卵型をした楕円型で、色も緑を基調としたもので、材質は亜鉛箔を使用していた。以後、担当者に於て検討を重ねて現在の菱形様式を採り入れています。

現在授与致しておりますステッカー守札の仕様は、塩化ビニールを特殊加工した台紙を菱型に打抜き、赤色を基調に中央上部に当大社々紋の「楢の葉と実」を白色抜きに図案化、その下に黄色地に黒字で宗像大社名を入れ、最下部に白字抜きの交通安全名を挿入したもので、タテ八・五㎝ヨコ十二・五㎝、裏面に特殊接着ノリをつけ車輌のウインドガラス又はボディーに装着できるようになっております。特にガラス専用として車検マークと同様に内側より装着するステッカー守札も授与致しております。

このステッカー型式のお守は今日では、全国各地の神社でも採用し、型・色・材質等多種多様の物が作製されているが、当大社はその先駆者として又、全国で初めて交通安全に取り組み、御祭神の神徳並びに神威をもって交通事故より皆様方をお守りすると共に、交通事故の撲滅に寄与する為に、より良いステッカー守を作製することを期しております。

ステッカー守札の初穂料は左記の通りです。

（内貼・外貼共）

一体　一〇〇円

尚、交通安全祈願（お車のお祓い）の祭典をされました方には無料にて授与致しております。

――◇――◇――

✤お車の交通安全祈願祭とお祓をご希望の方は授与所受付にお申し出下さい。

祭典初穂料は次の通りです。

一、大型車・特殊自動車

一台　五〇〇〇円也

一、普通車・軽自動車

一台　四〇〇〇円也

一、自動二輪車・軽車輌

一台　三〇〇〇円也

✤祭典を申し込まれました方には、

一、交通安全守札一体

一、安全ステッカー一体

一、神宝館拝観券一枚

一、撤下供物

を無料にて授与致しております。

✤遠方にお住いの方、参拝不可能な方には郵送による交通安全祈願の祭典並びに交通安全守札授与の受付を致しております。

詳細については左記へお問合せ願います。

〒八一一―三五

福岡県宗像郡玄海町田島

宗像大社社務所

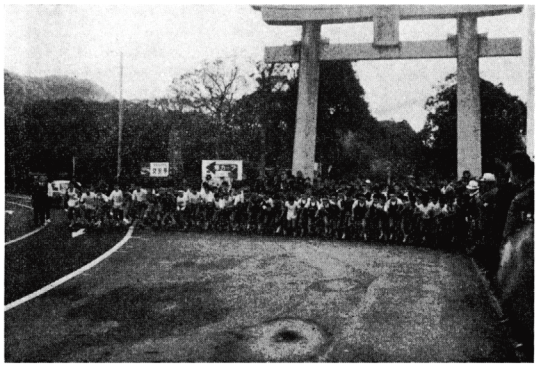
祭儀部賽務課

TEL（〇九四〇）六二―一三一一㈹

以上

号砲一発!! 競う健脚

第二十八回 宗像マラソン大会



（大鳥居前スタート　5K中学生の部）

福岡県陸上界の初頭を飾る宗像マラソン大会が、去る一月二十日（日）、晴天ながら寒風が肌を刺す中、約七百五十名のランナーが参加して開催された。

今年で二十八回を数えるこの大会は、福岡県のマラソン大会としては最も歴史が古く、又新人の登龍門として、その実力を試す絶好の大会でもあることから、毎年県内の長距離ランナーが多数参加している。又ある高等学校では、この大会をその年のクラブ活動のスタートとして、毎年参加、以後の各種大会に臨むためのの大事な出発点としているそうでもある。

コースは当大社の正面大鳥居前をスタート、吉田・玄海中学校経由、当大社大駐車場前ゴールの五キロの部（中学・高校・一般の三種目）と、高向・神湊入口経由の十キロの部（オープン）で、午前十時三十分に五キロ中学生の部が号砲一発スタート、以後一定の間隔で高校・一般・十キロの部とスタート、新春の宗像路に於て健脚を競った。

尚成績・記録は次の通りである。

（五キロの部）

❊中学生の部

一位下川　修（須恵中）16分13秒
二位只隈　幸太郎（霧ケ丘中）16分14秒
三位渡辺　康博（篠栗中）16分17秒

❊高校生の部

一位中村　和之（大牟田高）16分04秒
二位安松　敏郎（遠賀高）16分11秒
三位福井　元毅（粕屋高）16分44秒

❊一般・学生の部

一位宮崎　行雄（新日鉄化学）15分43秒
二位原　善嗣（福岡県警）15分58秒
三位末広　久夫（福岡県警）16分16秒

（十キロの部）

一位平塚　竜也（福大大濠高）30分35秒
二位黒石　智視（古賀マラソンクラブ）30分40秒
三位境　義幸（門鉄）30分42秒

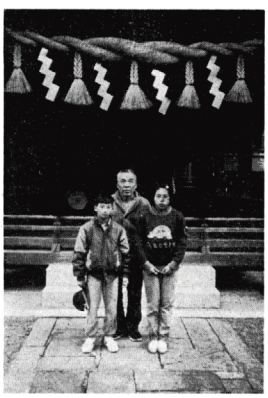
遠い国アルゼンチンから里帰り

――ブエナスタルデス（こんにちは）――

昨年十一月二十八日、アルゼンチンから二人の日系二世が大島へ里帰りして話題となっている。

二十年前、大島から遠い南米へと移民した船越新平氏（四五）、歌代さん（三七）夫婦の子供さんで、船越アンジェリーナさん（一二）と、エクトル君（一〇）である。

歌代さんは、当社沖中両宮奉賛会副会長を務める沖西彰氏の長女で、この船越さん夫婦は、南米のパリーといわれるブエノスアイレスから南へ一三〇〇キロ離れたリオネグロ州、アーゼンで手広く花屋を営んでおり、多くの移民者が坐折する中、忍耐と努力によって現在の生活を築きあげた数少ない成功者である。



この中津宮は、自分達の両親が結ばれた処という事で大変興味があるらしく、先日境内で二人と出会った。

ブエナスタルデス（こんにちは）と笑顔の二人、姉のアンジェリーナさんの好物はラーメン、将来は幼稚園の先生になりたいという彼女は大島小学校に通学しており、クラスの人気者、スペイン語、英語、そして日本語と三カ国の言葉を話せるが、中でも日本語が一番難しいという。

南米の音色に魅了されて

＝ケーナとギター合奏＝

昨年一月末に着工、十一月末に宗像市役所隣接地に竣功、四十八年ぶりに新しくなった宗像警察署の落成祝賀会が、一月十八日午前十一時より、同署三階武道場に於て開催された。

この祝賀会にて、当社神島定権祢宜が、当社養父守祢宜の子息養父信夫さんのギター伴奏により、手製のインディオ管楽器「ケーナ」にて、ペルー民謡の「コンドルは飛んで行く」を披露した。

神島権祢宜は、県神社庁の雅楽講師をつとめるだけに、音楽に対する造詣も深く、本来は葦で作るべきケーナを、竹を使って数十本製作、練習を重ねるうちに本物と変らない音色が出せる様になった。

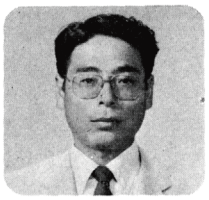
ケーナとの出会いは、昭和五十七年に神道国際友好会による南米研修旅行に参加、その際哀愁のある南米のインディオ音楽に魅せられると共に、日本古来の音楽である雅楽とも相通じるものがあるのではと感じ、ケーナを始め、シーク、チャランゴなどの楽器を持ち帰った。それ以来独自でインディオの音楽を勉強、特にケーナに強い魅力を感じる様になった。

落成祝賀会に参列した人々も、生のインディオ音楽を耳にするのは初めて、ギターとケーナの素晴しいハーモニーに、遠く南米の地に身をおいている様な表情だった。

尚、次号より日本の雅楽の楽器とインディオの楽器との比較紹介を掲載する予定です。

〝みつめよう教育　ひろげよう地域の輪　創ろう新しい宗像〟

社団法人　宗像青年会議所
理事長　堤　宏



戦後四十年、我国は驚異的な復興、発展を成し遂げ経済大国と呼ばれる程に成長しました。私達青年会議所会員も、ほとんどがこの間に生まれ育ち、恵まれた生活をしてまいりました。しかしその華やかな成長の反面、価値観の混乱、心の荒廃、経済・資源・エネルギー問題、構造不況等、急速な発展の歪みというべき多くの矛盾、諸問題に直面しています。こうした時代背景の中宗像だけが特別という訳にはまいりません。

この様な厳しい状況の中昨年創立十周年記念式典を始め種々の事業を挙行、大事な節目の年を無事経過することができました。これも偏に地域の皆様方の暖い御理解と御支援の賜と心より感謝申し上げます。

扨て、今年度は新たなる第一歩を踏み出す重要な年であります。私達はこの社団法人宗像青年会議所の二十年の歴史の重みを充分に認識し、今日迄青年会議所を育んでいただいた、地域住民の皆様方が私達に期待する物は何なのか、又これ迄先輩方が歩んでこられた足跡を今一度振り返り、それを踏まえて時代のニーズに即応した活動を、青年としての勇気と情熱をもって、皆様方と共に展開してまいりたいと念じております。

私達の郷土宗像は大きく変貌してまいりました。しかしその中に私達が子孫に残さなければならない貴重な財産と伝統が数多く残っています、そしてその最大なものは「宗像教員と宗像卵」と今でもいわれている様に、優秀な人材を多く輩出した「教育郡」の風土であります。私達青年会議所創立の最大の理由は「教育郡宗像」の復活にありました。現在の教育現場や環境を見わたした時、その実態をどれ程把握しているでしょうか。教育と人間形成は表裏一体をなすものであります。「校内暴力」「家庭内暴力」などと称され、青少年の問題が大きくクローズアップされている今日、次代を担う国の宝である青少年の健全な育成に、私達は腰を据えて本気で取組まなければならないでしょう。その為には自分達の子供が通う学校を、おかれた環境をそして家庭を見つめ直し、真剣にこの問題に取組むべきだと考えます。その為にも私達は親として、人間として、教育というものに積極的にアプローチしていきたいと思います。

今一つは、「一郡一市」の問題であります。これもやはり創立当初からの大きな課題であります。地方の時代といわれる今日、私達の愛する郷土をより発展させるにも、住みよい地域にするにもさけて通ることのできない大きな命題です。

広域行政の是非、各市町村の利害関係など復雑な、そして私達では推測のできかねる数々のネックがあることは充分に推察されます。しかし私達はあえてこの問題に正面から取組んでいきたいと思います。古来より「神郡宗像」として、私達の祖先が誇りを持って暮し、その「醇風美俗」を守り、伝統を子々孫々受け継いで来たことを思うと、私達は一日も早くその実現を願わずにはいられません。日本に誇りうる、否世界に誇りうる「宗像」なのです、この素晴しい、伝統ある「宗像」に住む私達は、「神郡宗像」といわれる所以を一人一人が考え、自覚すべきではないでしょうか。そして私達は単年度で終ることなく、実現する日が来るまでこの問題に取組んでまいりたいと思います。

しかしながら私達の取組むべき活動はまだまだ沢山あります。しかし私達の力はそれこそあまりにも小さなものでしかありません。よりよい地域社会の実現には、地域住民の皆様方と手を取りあって進んで行くはかはありません。私達の活動に御理解を賜りまして、絶大なる御支援と御協力を切にお願いする次第です。

昭和六十年度役員

理事長	堤　宏
直前理事長	大竹善雄
副理事長	井上進一
〃	保井　享
〃	井上重信
〃	吉武生蔵
〃	寺田　修
〃	轟　俊夫
専務理事	安増惇夫
常任理事	石津大輔
監　事	今泉義広
総務委員長	吉田成徳
副　〃	内田治男
例会運営委員長	松井多聞
副　〃	長浜義臣
広報委員長	石田守行
副　〃	指導力開発委員長藤岡末英
副　〃	森本義征
会員開発委員長	高橋泰道
副　〃	中村常樹
青少年開発委員長	伊豆幸次
副　〃	豊村憲一
経営開発委員長	中村義仁
副　〃	内田　潔
社会開発委員長	中野和志
副　〃	長崎　望
長期計画室長	轟　俊夫
〃　委員	井上征夫
〃	永島駿治
〃	今村春彦
〃	古野光久
〃	小山達生
〃	高向正秀
福岡ブロック副会長	大竹善雄
日本JC出向並福岡ブロック協議会行革特別委員長	保井　享
日本JC研修委員会出向	元岡英明
九州地区協議会褒賞委員会副委員長	今村春彦
ブロックアカデミー出向	吉井英海
〃	古野　進
〃	花田善信
事務局員	塩川英子

雑記

二月十一日は「建国記念の日」である。人に誕生日があるように、国の誕生日を祝うのは当然であろう。こういうことを言うと、古くさいと軽んずる人もあるかも知れない。しかし国家は長い前史と基盤があって形成されるものであり、突如としてできるものではない。我国の歴史を考えると、それは万世一系の皇室と共に歩んで来た国柄であり、皇室の歴史は日本の歴史でもある。

我国の主権は天皇にある。これは建国以来不変の事実である。昭和二十一年に制定された日本国憲法により、天皇の地位権限は変ったとはいえ、なお国家及び国民の代表として、依然としてその地位を継続していることに変りはない。そしてこの万世一系の皇統の歴史は、他の国に例を見ない。

「建国記念の日」の制定について見ると、明治五年に神武天皇即位を祝う祭典が行われ、「紀元節」という名称が決定した。この時は一月二十九日（旧暦の一月一日）であったが、明治七年に太陽暦に換算され、二月十一日となった。しかし「紀元節」は敗戦により一時廃止され、昭和四十一年に「建国記念の日」として復活した。

何はともあれ、国の誕生日を素直に祝いたいものである。

宗像大社歌会 俳句作品集（二六四）

新らしき雪を背に受け訣れねば　津屋崎　井浦　良介

かれ川も景色をなせり木の葉あめ　福岡西　入江　柳江

鐘崎　岩瀬　辰夫

友の家近づくにつれ梅匂ふ　福　間　二宮　末子

処女雪にバイクの跡も深ぶかと　福　間　広渡一寿軒

年酒から友は嵯子の悪い癖　田　熊　安部　ゆき

太箸の掌にもどかしき今朝の膳　津屋崎　西住喜三郎

暦かけ替えて鐘きく去年今年　香　椎　板矢クニコ

水仙に積るともなく牡丹ゆき　藤　沢　井上　玄洋

光る波末広がりて片帆舟　名古屋　野崎　傳三

柘榴の実はぜて枝垂れる駐在所　田　熊　力丸　一郎

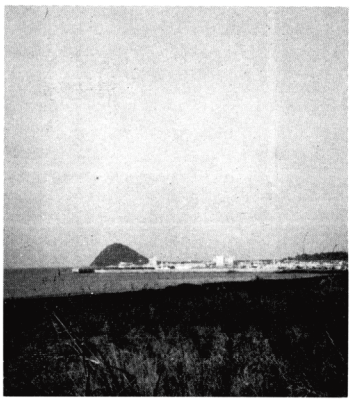
音もなく庭を粧ふて牡丹雪　福岡中央力丸ゆずる

粛々と神の山頂初西

玄界灘地名探訪 (10)

宗像郡玄海町鐘崎 (2)

いしいただし



岬が鐘状を呈しているために命名されたものか、これについて考えてみたいと思います。

その前に、鐘はいつ頃まで、さかのぼるものでしょうか。

記録の最古のものとしては、「日本書紀」の欽明天皇二三年（六世紀ごろ）、大伴狭手彦が高句麗から持ち帰った「銅鏤鐘三口」というのがありますが、これは全く形状不明です。

鐘には朝鐘、時鐘とか、仏教の寺院の「梵鐘」等、いろいろな用途、種類があるようです。鐘は仏教伝来と共に請来されたものでしょうが、奈良県・中宮寺の天寿国曼荼羅繡帳にも図があります。遺品としては、白鳳時代のが一六口残っているといわれます。

最古の紀年銘鐘は、京都妙心寺鐘で、六九八年のものです。これと同じ時期の工房のものとされるのが、太宰府の観世音寺の鐘です。福岡市（旧粕屋郡）多々良で鋳造されています。

古く、どこまで鐘の形状を当時の人達が認識していたのかということです。地名の生れる背景を考えてみますと、多くの人達の共通の認識が背後にあるので、その点を考えると少し無理があるような気が致します。ただ、今は漁民アパートやら、かなり大きな建物が、鐘崎の周辺には建ち、近くから見ると、だいぶ小さくなりましたが、古い時代（近世までを含めて）には、どこからでも見える、特に玄界側から見る形状は、どっしりとした「鐘状」の岬をしています。

もう一つは金鉱説です。筑豊沿海誌の中でも、金鉱に関する説を記していますが、この付近一帯は、金鉱の採掘もなされ、それに関する地名も見受けられるようです。

上八（こうじょう）の金山址として、「宗像郡誌」の記事を拾ってみますと、「村の東南二町許りにあり。昔、此の山中にて、金を掘りしが多からずとて止みぬ。今猶鉱穴二七ケ所あり（中略）金控磯いうも山中各所にあり。

嘉永六年（一八五三）二月旧藩にて新金坑開かる。其田字常楽、三本平、大切（以上古金坑）、葉種畠、野口、仁田尾、牛ノ尾、井手ノ口、此の外にもあり、出金の多き事、田野村に亜ぐ、文久二年（一八六二）二月より休山せり」

このように湯川山周辺には金鉱が多く、その採鉱の歴史があるようです。近世の採掘の方が多いようですが、釣山には実在は疑わしもあります。

金や鉄などの金属に対しては、古代には相当強い関心があった筈です。各地で鉱脈の探査がなされていたことも十分考えられます。金崎は、そのような鉱脈のある地としての金の出るところのさき、すなはち先端のあるところという意も考えられはしないでしょうか。

金が鐘になり、それは岬の形状が鐘に似ていることに変わり、この付近の海は、風浪の際に、激浪となって鐘の音のように、響き、響護の名となり、いつしか、その海底に鐘が沈んでいるという伝説を生むことにもなったのではないかとも考えたります。

最後に地名の語源については、なかなかむつかしいものがあります。

鏡味完二氏は「地名の語源」の中で次のように述べています。

『地名の語源の考察は現地から出発して現地へ帰るべきだ。そして、現地の観察によるほかはない。地名型の適用自体も山地、海岸等立地によってもちがうし、地方によってもちがう。ゆえに、ふたたび現地に立ちもどって、その立地条件、とくに地形を読みとる必要がある。場合によっては、その土地の風俗、伝説、考古学的遺物なども参照すべきであろう』（角川書店、昭和五十二年刊）鐘崎の場合も、もっと周辺を歩いてみるべきでしょう。

保存と調査活動（上）

文化財についての考え (25)

楽松　子

各地で出土した考古遺物・伝世してきた古文献資料・諸物件等の文化財の保存・保護及び国民への伝承・伝達を目的として国公私立の博物館・歴史館や神社仏閣の神宝館・宝物館が数多く建造されてきている。

宗像大社も沖ノ島祭祀遺跡からの出土神宝をはじめとして、中世以降から続いている文書典籍類・美術工芸品の宝物類と共に、各時代に奉献されてきた物件が多く収納されてきている。

先号でもすでに述べてきたように、郷土の歴史を守り、遺産の散逸を防ぐ目的で文化財保存事業の一環として、昭和三十九年に宝物館（宗像郡重要文化財共同収蔵庫）を建設開館してきた。しかしながら、その后における沖ノ島調査も含めて、当社所蔵の文化財の物件が、飛躍的に増大している。ここでその当時の社会の助力ともなる。その意味から考えても、この館は郷土の歴史博物館の性格をも兼ねていることは言うまでもない。

神宝館のすぐ横を、天井川的な景観を呈しながらも、当地方最大の河川である釣川が流れている。また一方裏側は低い丘陵地に取り囲まれているので、湿気で上げ紹介する。防犯・防災には最新の施設を配備しており展示ケースや内装に関する件が一番の懸案事項である。当社では常に、文化財を高湿の風土からの防禦策を考慮し建築してきている。

宗像大社神宝館は、当大社が古来から所蔵してきている数多くの宝物と、宗像の地域の文化をしのばせる古代の国民的遺産とを一堂に会し、永久に保存していく目的で、昭和五十五年十一月八日に開館した。一方ここでは収蔵・展示をしている文物館の建設時も、湿気に関しては収蔵庫を建設開館してきたことが出来る。

神宝館の建設から現在に至る事柄に関しては、種々報告されてきているが、ここで建物の構造を再度取り

こちらの館は、現在収蔵庫として利用しているが、この旧宝物館の第二展示室は、研修室としても多くに活用する。

神宝館は鉄筋コンクリート高床式三階建からなっており、延べ面積は約二千平方米（七百坪）を測る。西側に現存している昭和三十九年に開館した宝物館とは渡廊下で連結させている。

神宝館は、現在、この館の第一展示室に日本の古代史の焦点である対中国・朝鮮との外交交渉時において、宗像が果たしてきた役割と、その位置づけをしていくための研究から考えても、この館は郷構成を研究し、歴史文化を紐解き調査していく機関と施設とを新たに設置し、公開して今年でもう四年の歳月がすぎた。

宗像大社神宝館は、当大社が古来から所蔵してきている数多くの宝物と、宗像の地域の文化をしのばせる古代の国民的遺産とを一堂に会し、永久に保存していく目的で、昭和五十五年十一月八日に開館した。一方ここでは収蔵・展示をしている文物館の建設時も、湿気に関しては収蔵庫を建設開館してきたことが出来る。

神宝館の建設から現在に至る事柄に関しては、種々報告されてきているが、ここで建物の構造を再度取り上げ紹介する。防犯・防災には最新の施設を配備しており展示ケースや内装に関してはここでは省いていく。展示及び収蔵保管を目的として建設されたこの館は、特に文化財の品々の保護保存に留意しており、その事を重点項目に上げて設計している。このために赤外線・紫外線等の太陽光線の遮断を目的として、無窓となっている為、他の博物館と趣を異にしているように見える。外観は大きな倉庫をみるようでもある。熱気や湿気等の外気防除の為に中空とした二重構造からなる天井・床面・側壁を備えている。この館を覆っている屋根もコンクリートの屋上に鉄骨を組み、その上に鉄板を張りつけ空間を設けた二重として、日光の反射熱を合せて遮えぎっている。全体として空洞の中に各室を組み込んだ状況である。この為に館内は自然の状態を保持し、常時一定の湿度を保っていくことが出来る。文化財保護上の一番の問題点とされている湿気存並びに、調査に関しての事業を引き続き行なってきていること。ここにその数例を注記していく。

昭和四十年五月六日重要文化財色定法師一筆一切経四三三一巻の保存修理事業を開始した。現在全体の三分の二の修理を完了しているが、今も継続して行なっている。

るダンパー・ファン・除湿機の装置をも合せて設置しており、常に湿度が五十五～六十五パーセントの枠の中に留ることとしている。当館保有の文化財は、金属製品・木製品・紙製品・土製品・石製品と多種類の材質にまたがっているが、保護の重点を湿度においているので、物品をき損から防ぐことが出来ていると思われる。

こうした新しい神宝館の建設に入るまでにも、昭和三十九年以降も文化財の保存並びに、調査に関しての事業を引き続き行なってきていること。ここにその数例を注記していく。

昭和四十年五月六日重要文化財色定法師一筆一切経四三三一巻の保存修理事業を開始した。現在全体の三分の二の修理を完了しているが、今も継続して行なっている。

宗像むかし話 (四)

「色定法師」

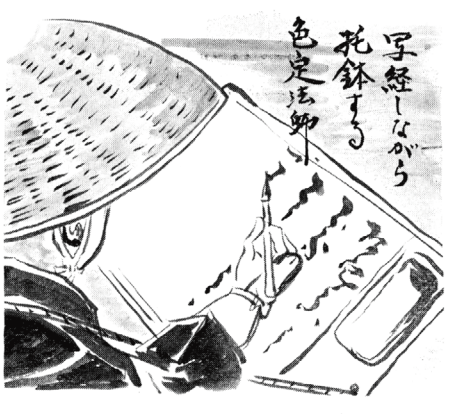
頼朝が鎌倉幕府を開いた時に色定法師は三十四才であった。彼は「筑前国続風土記拾遺」によると

色定姓ハ佐伯、社僧兼祐ガ子、母ハ藤原氏、姉弟アリ。姉ハ安部惟久ガ妻、弟ハ佐伯兼久ト云。

社僧学頭良印ニ学ブ。筑前宗像記及ビ本朝高僧伝等、杜撰多シと見える。異説も多々あるが、一応右によれば、色定法師は筑前宗像宮の社僧であったことが分る。

「筑前国続風土記」宗像郡田島一切経并石仏、の項によると、

色定法師がかける蔵経一部は、彼唐より来りし蔵経を元本として、一筆にて書写せし本也。色定は田島の座主宣祐が子也。平治の年誕生、字を良祐と云。聖福寺開山千光国師法弟也。早く釈門に入りて、博く群籍に渉る。一日法華四功徳の文を誦て、始めて蔵経一筆書写の大願を興し、是により入宋し、本邦に帰り、宗像田島に来り、大宮司氏国（三十六代）に対し、弘く瞿曇の玄教を演べ、誘くに写経の功徳を以てす。爰において氏国帰依の志を発し、資材をすてて、良祐をして蔵経を書しむ。板屋を神廟の側に営み、書写爰に初まれり。起居動静書をこととし、暫くも墨筆を放さず、道を行にも、机を首にかけて書写しけるとかや。色定法師二十九歳、文治三年（一一八七年）四月十一日始めて筆を起し、嘉禄二年に至てその功終る。その間四十一年、経巻の末に年と名を記す有。建暦三年書写比丘栄祐法師書、又建久六年一切経一筆行人比丘良祐と書し、或は文治三年僧良祐と書す。此外は色定と書り。名を出さざる巻も多し。紙をうぎし糊は製法を入宋の時習ひ来り、今に至てつぎめ離れず。此経元は五千四十八巻有。蠹多し。又中頃やけて、今は四千六百巻となれり。此蔵経今も神廟の西の側別屋に在て、神宝のごとし。色定自我が木像を刻み置しも、今に在。仁治二年圓寂す。年八十三。その墓は田島村興聖禅寺に在。云々



とある。これによって彼の事蹟の大要は察せられよう。

時は丁度平家滅亡の頃であった。天下は騒乱し、鎌倉幕府が創立された時代である。地方荘園はすべて武家の支配するところとなり、「武力」が万民に臨んだのである。兼好法師（徒然草）、鴨長明（方丈記）らの著名な文人が穏遁し、北面の武士であった西行法師が諸国を流浪した末世的な世相の時であった。その時にあたって「世直し」のため「衆生済度」のために敢然と起ち上ったのが色定であった。四十数年間に及ぶ永い年月を、宗像宮と孔大寺神社には欠かさず日参し遂に偉業をなしとげたことは驚嘆に値する。

宗教家にも二様の生き方がある。一つは自ら行ないすまして一生を送る者、一つは積極的に宗教活動をする者。色定は後者に属する。

一切経は永く宗像大社に蔵せられてきたが、明治初年の神仏分離令により、田島村興聖寺に移管されていった。

先年宗像大社宝物館が竣功し、一切経も旧来に復し、大社の神宝（国宝、重文）と共に大切に保管収蔵されている。

彼の遺徳は今に至るもその光を失わず、旧田島村歌にも採り入れられた。彼の墓は興聖寺にある。彼の木像も興聖寺に伝えられて、静かに世の成り行きを見守っている。